

# 読書興味の発達段階モデルについての再検討

(中間報告)

専修大学 野口 武悟

## Reexamination of the developmental model of reading interests

Senshu University NOGUCHI, Takenori

### 要約

近年、子どもの読書活動を充実しようという社会的機運が高まっている。学校において司書教諭らが子どもに対して適切な読書指導や読書相談を行うためには、読書能力や読書興味の発達段階を理解し、子ども一人ひとりの能力や興味の発達の状態を把握していることが不可欠となる。ところが、読書興味の発達に関しては、わが国では近年、新たな研究が少なく、読書興味の発達段階については、現在でも阪本一郎が約60年前に提示したモデルが広く用いられている状況にある。子どもを取り巻くメディアや読書環境が激しく変化している現在にあっても、阪本の提示したモデルは、はたして有効なものといえるのであろうか。そこで、本研究は、阪本の示した読書興味の発達段階モデルを再検討し、現状に即した発達段階モデルを提示することを目的とした。本稿は、研究の中間報告として、読書興味の発達に関する先行研究を整理したうえで、研究の目的と方法、現在の進捗状況と今後の計画についてまとめた。

【キー・ワード】 読書指導, 読書興味, 発達段階モデル

### Abstract

These days, there is an increased move towards enriching the reading activity of children. For a teacher-librarian at school to give appropriate reading guidance and advice, understanding the developmental model of reading abilities and interests are essential. However, currently, there are only a few new researches in Japan on reading interests and, therefore, the developmental model of reading interests presented by Ichiro Sakamoto almost 60 years ago is still being used. The model that had been presented by Sakamoto cannot be considered effective when the media and the reading environment of children have changed significantly since then. Therefore, this research aims to review Sakamoto's model and present a development model for reading interests that reflects the present situation.

【Key words】 reading guidance, reading interests, developmental model

## はじめに

近年、子どもの読書活動を充実しようという社会的機運が高まっており、「子どもの読書活動の推進に関する法律」（2001 年制定）や、「文字・活字文化振興法」（2005 年制定）が相次いで制定されている。また、2003 年 4 月からは 12 学級以上の規模の小、中、高等学校等に司書教諭の配置が義務づけられた。こうした状況を受け、学校現場では、校内で読書活動の推進に取り組むところが増えている（朝の 10 分間読書など）。その中核となるのが司書教諭である。司書教諭の仕事は多岐にわたるが、なかでも子どもの読書指導や読書相談は重要であり、適切な指導や相談を行うためには、読書能力（reading ability）や読書興味（reading interests）の発達段階を理解し、子ども一人ひとりの能力や興味の発達の状態を把握していることが不可欠となる。

ところが、読書興味の発達に関しては、わが国では近年、新たな研究が少ない状況にある。なかでも、読書興味の発達段階については、現在でも、阪本一郎が 1949 年から 1950 年にかけて提示したモデル（阪本，1949；1950）が大学における司書教諭養成科目の主要なテキスト（例えば、朝比奈，2002；増田ほか，2004 など）に掲載され、教えられている。

はたして、60 年も前に示された阪本の読書興味の発達段階モデルは、子どもを取り巻くメディアや読書環境の変化が激しい現在にあっても、なお有効なものといえるのであろうか。そして、もし、有効でないとするならば、モデルを現在の子どもの読書興味の实態に即して修正する必要がある。

以上のような問題関心のもとに、本研究を進めている。中間報告である本稿では、読書興味の発達に関する先行研究を整理したうえで、本研究の目的と方法、現在の進捗状況と今後の計画について報告したい。

## 読書興味の発達に関する先行研究

### （1）読書興味の発達に関する研究の動向

読書科学の近年の研究動向をレビューした塚田泰彦によると、「1960 年代に、読書興味やレディネスの研究、読書と性格や態度に関する研究にまとまった成果があることも注目される」と述べている（塚田，2010）。また、1982 年に過去 25 年間の読書科学研究の動向を整理した阪本敬彦も、読書興味の研究は、初期（1950 年代・60 年代）にいくつかかたまっており、「これら一連の読書興味研究のあと、長い間論文が途切れ」たとしている（阪本，1982）。

このように、読書興味の発達に関する研究は、1950 年代から 60 年代にかけて盛んに行われ、以降、研究が少なくなっている状況が窺われる。もちろん、近年においても研究が皆無なわけではなく、一中学校を事例に中学生の読書興味の発達の検討を行った研究（神崎，2010）など、興味深い研究も見られる。

## (2) 読書興味の発達段階に関する研究

研究動向は前述したような状況であるが、読書興味の発達段階に関する研究についてももう少し詳しく見ておきたい。

読書に関する児童の発達段階モデルを最初に提示したのは、Gray,W.S.とされ、1925年のことであった(Chall,1983)。以降、英語圏では、今日に至るまで、読書の能力や興味に関する発達段階モデルが現状に即して提示され、また、その追試が行われ続けている。

一方、わが国で広く知られる発達段階モデルを提示したのは、すでに述べたように阪本一郎であった。このときのモデルになったのはGatesが1947年に提示した発達段階モデル(Gates, 1947)であった。阪本による読書興味の発達段階モデルとは、a.子守り話期(2歳～4歳)、b.昔話期(4歳～6歳)、c.寓話期(6歳～8歳)、d.童話期(8歳～10歳)、e.物語期(10歳～12歳)、f.伝記期(12歳～14歳)、g.文学期(14歳以後)、h.思索期(17歳以後)というものである。

阪本は1976年の自編著のなかで、この発達段階モデルの元になった「資料は戦前に集めた子どもの読書傾向であるが、この傾向は戦後の今も同じであることから、発達課題は今も昔も変わらない」と述べている(阪本, 1976)。この記述の根拠になっているのは、阪本らが行った追試であるが、それも1959年の2つの研究が最後であり(阪本・西尾, 1959; 阪本・野口, 1959)、それ以降追試は行われていない。1959年の両研究では、「従来研究された、読書興味の発達の段階を修正すべき、発達心理学的、社会学的変化はないのである」と結論付けている。

この阪本のモデルは、その後、『学校図書館事典』(第一法規, 1966)や『現代読書指導事典』(第一法規, 1967)などの学術事典でも、阪本自身によって、あるいは他の研究者によって、広く紹介、解説されていく。そして、現在でも大学の司書教諭養成科目のテキストに掲載されていることはすでに述べた通りである。なお、阪本は、1979年に自らの発達段階モデルに一部修正を加えている(阪本, 1979)が、新たな調査を行ったわけではなく、ベースは同じである。

1990年代に入って、樋口洋子が、阪本の発達段階モデルは「現状に即しているとは言いがたい」として、児童図書館1館の利用者(児童63人)を対象に読書興味の発達段階に関する新たなモデルを提示しようと試みた(樋口, 1991)。しかしながら、対象児童数が少なく、かつ十分なモデルが示されたとは言い難いという課題が残されたままである。

## 本研究の目的と方法

以上をふまえて、本研究では、阪本の示した読書興味の発達段階モデルを再検討し、現状に即した発達段階モデルを提示することを目的とする。

すでに述べたように、近年、子どもの読書活動推進の実践が盛んになっている。こうした実践を支えるためには、読書興味の発達をはじめとする、子どもの読書に関する基礎理論研究の再考(ないし再興)が必要である。本研究は、若干ながらも、その一端を担うことができるものと考えている。

上述の研究目的を達成するため、阪本・西尾(1959)及び阪本・野口(1959)の用いた調査方法(質問紙調査)及び分析方法を援用して、追試を行う。調査対象として、(1)幼稚園または保育園、

(2) 小学校, (3) 中学校, (4) 高等学校の4校種を設定し, それぞれの校種で都市部と地方の5~6校程度(阪本・西尾及び阪本・野口の研究と同規模)を抽出し, 調査を行う。以上の調査で得られたデータを分析し, 考察(阪本モデルの再検討)を行う。

## 現在の進捗状況と今後の計画

本稿執筆の時点(2010年11月)においては, 質問紙の設計にとりかかっている。今後, 2011年3月までに予備調査を行い, その後, 本調査を実施する予定である。

## 引用文献

- 朝比奈大作編(2002). 読書と豊かな人間性. 樹村房.
- Chall, Jeanne S. (1983). *Stages of Reading Development*. McGraw-Hill.
- 深川恒喜ほか編(1966). 学校図書館事典. 第一法規.
- Gates, A.I. (1947). *The Improvement of Reading: A Program of Diagnostic and Remedial Methods*. Macmillan Company.
- 樋口洋子(1991). 成長期における児童の読書興味の変化とモデル化, 図書館学会年報, **37**(4), 166-178.
- 神崎友子(2010). 現代の中学生の読書興味と発達の検討: 「本の紹介」における選書から. 京都教育大学教育実践研究紀要, **10**, 1-11.
- 増田信一ほか(2004). 読書と豊かな人間性(改訂版). 放送大学教育振興会.
- 阪本一郎(1949). 興味とその発達. (児童研究会編. 児童の行動と発達(下). 金子書房, 89-112.)
- 阪本一郎(1950). 読書指導: 原理と方法. 牧書店.
- 阪本一郎・西尾宗人(1959). 小学校児童における読書興味の発達についての一調査. 読書科学, **3**(3), 13-21.
- 阪本一郎・野口隆(1959). 中・高等学校生徒における読書興味の発達についての一調査. 読書科学, **3**(4), 29-32.
- 阪本一郎ほか編(1967). 現代読書指導事典. 第一法規.
- 阪本一郎(1976). 読書興味の発達. (阪本一郎編著. 現代の読書心理学. 金子書房, 117-144.)
- 阪本一郎(1979). 読書興味の発達と指導. 読書科学, **23**(2・3), 44-50.
- 阪本敬彦(1982). 読書科学研究の25年(Ⅲ): 1号から50号までの心理学的研究を中心に. 読書科学, **26**(2), 85-90.
- 塚田泰彦(2010). 読書科学研究の近年の動向と課題. 専門図書館, **242**, 9-13.